

第一話 三人の熟女

夢の世界には、女肉が常に茫洋と広がっていた。

たった一人の男を、一糸も纏わぬ無数の麗人が祀り上げる。洋々とした草原を美女の肌色が塗り潰しており、絶対的な存在を崇めるが如く、一人一人が涙で男を渴仰していた。

女性陣が祈るような合掌で一人の男を崇拜する。

「祭祀様……」

「今宵様っ」

「ああ、祭祀様っ!!」

中心に立つ男を今宵祭祀こよいさいしと叫ぶ。

整った容姿や達者な口先が目立つ青年である。性格も無難とは言い難く、官能許容力が他者とは段違いと自惚れて止まない。官能許容力とは祭祀の造語であり、要は艶福に染まる自信家だった。

自信というより確信かもしれない。ハーレムを築くこと、それを祭祀は願望ではなく使命だと感じているのだ。日々に夢見る光景が妄想と思えず、もつと高尚な意思なのだと思嘆していた。

故にだろう。突如としてスマホに「催眠」なる文字が浮かび上がった。祭祀は驚くより先に、寧ろ「遂に来たか」という気持ちだった。

「理事長!! 男性教員を雇うとは、どういうことですかっ!?!」

「しかも、選りによって女子寮に配属とは、私は絶対に認めませんっ!!」

「これは決定事項です。確かに我が黒百合女学園は、百年以上も男禁制を貫いてきました。教職員はおろか、警備員すら全員が女性という現状です。しかし、昨今に頻発するトラブルを考えると、やはり男性のお力も必要と考えます」

「ううっ、わ、私は認めませんよ。こ、このような、こんなっ!!」

「どうも、今宵祭祀と申します」

「ふんっ!! どうでも良いわよ、貴方の名前なんてっ!!」

「今宵さんと言いましたか。絶対に追い出してやりますから」

代表理事に猛反発を繰り返すは、女学園の学長と副長だった。

黒百合女学園が男子禁制という仕来りは、もはや伝統と呼ぶに相応しい。だからこそ、過保護な親御も安心して娘を預けるのだ。祭祀という男性が忽然と現れれば、お偉い方が敵意を剥き出すのも仕方なかった。

「申し訳ありません、祭祀様。まさか、あの二人が此処まで頑固とは」
「構いませんよ。これくらいは想定済みです」

「祭祀様がお望みならば、あの二人に免職を言い渡しますわ」

「それは流石に可哀想でしょう。まあ、わざわざ貴女が気を配ることでは
ありません。同僚なのですから、腰を落ち着かせて穏便に話し合いたいと
思っています」

「ふふっ、そう言つて二人も虜にさせるのでしよう。私にしたように♥」
「はは……」

二人きりになり、早速と代表理事が祭祀に絡み付いてくる。先程までの
毅然とした様子は欠片も無い。祭祀を主と崇め、恍惚と女を露呈しながら
股間に頬擦りする。既に硬直した股間をズボン越しに感じると、理事長は
淫靡な顔で官能の吐息を見せた。

理事室にて、いまにも祭祀の衣服を剥こうとする勢いである。

「ああ、祭祀様。ご命令ください。私は何時でも準備万端です」

「……申し訳ないけど、もう理事長とエッチする気は無いですよ」

「え、ええええっ!？」

しかし祭祀は、既に理事長を眼中として居なかつた。

「貴女とエッチする為に、女学園の教師になったとお思いで？」

「そ、そんなっ!？」

「貴女を一番に墮としたのは、男子禁制の敷居を跨ぐ為に過ぎませんよ」
「う、うう。そうでしょうけど、め、面と向かって言わなくても……」

黒百合女学園への潜入を目的に理事を籠絡したのだ。懐に忍ぶスマホで「催眠アプリ」を用いれば、どんな女性も意の儘に操ることが可能となる。学園の教師に赴任して、更に女子寮の管理を任された身ならば、わざわざとうの立った女性を相手にする必要は無いと祭祀が言い放つ。

「悪いとは思っています」

「な、なんでもしますから、私を傍に置かせてください!!」

「理事長は身体が最高だから、確かにもっと色んなプレイを試してみたい気持ちがありますけどね。でも、これからは何人という学生を相手にする予定なので……興味はあっても、もう理事長を相手に出来る程の許容量は無いんですよ」

今日までの日を、催眠で好き放題に調教した祭祀である。用済みを言い渡された理事長が落胆の涙を流す。夫婦間でセックスレスが長引いていた理事長にとって、真の主人たる祭祀は正に女としての希望だった。

「うううっ、祭祀様!! お願い、します。捨てられたくありません……」
「くっ、ひ、引っ付かないで下さいよ」

「お願いします。祭祀様に見捨てられたら、私は死んでしまいます」
「ヒトは、そう簡単に死にませんよ」

「死んでしまいます!! 私には、貴方しか居ないのですからっ!!」

「理事長は人妻でしょう。旦那さんが居るじゃないですか」

「祭祀様が一番です!!」

「くうっ、理事長のおっぱいが当たるっ。そこも撫でないでくれっ」

「お慕いしております。誰よりも……」

空は夕暮れにあり、放課後の時間帯だ。教師としての着任は明日なので、下調べを兼ねて学園の見回りを考えていた祭祀である。しかし、理事室を出ようと背を向けた祭祀に、理事長が泣いて縋り付いてくる。四十代とは思えない哀れな依存だった。

背後からの抱擁と、そこから伸びる触手が祭祀の膨らみを捉える。

「はあ、仕方ないな。とりあえず、一度やれば気が済みますね?」

「ああ、祭祀様っ♥」

「望み通りの変態プレイで後悔させてやりますよ」

「ああ、祭祀様っ」

「理事長、何歳だっけ？」

「……47です」

「間もなく五十路になろう女の癖に、こんなにエロくて良いんですか？」

「恐縮です」

「褒めてないからな？ 一回り二回りも年下の男に、ここまで縋るなんて、理事長として恥ずかしくないのか？ 顔は真っ赤で涙まで浮かんでいるぞ。そんなに俺との行為が待ち遠しかったのか？」

「は、はい、勿論です。誰よりも、何よりも愛しております!!」

「従順な雌じゃないか。後は、我儘が減れば完璧なんだがな」

理事室に相応しい長大の文机へと理事長を押し倒す。五十歳に迫る女の、なんと淫猥な様子に、祭祀の股間も反応を止まない。人妻らしい肉付きと、主を崇める敬讓の表情が祭祀を攪り、室内は瞬く間に凜とした雰囲気から官能色へと上塗りされていった。

「自分で脱ぐんだ」

「わ、分かりました。でも、視られていると恥ずかしいです」

「じゃあ、視ないようにしよう」

「ダメですっ!! み、視ていて欲しいですっ!!」

「なんなんだよ……」

祭祀はプレイ中に敬語を使わない。主従関係を明らかにする為だった。

脱衣を指示された理事長が静かにスーツへと手を掛ける。ジャケットを脱いでワイシャツのボタンを外していく。その様子を間近で眺める祭祀に、理事長は塩を舐めるような鬨めっ面を浮かべていた。

羞恥に耐えているのだ。想い人に脱ぐ瞬間を注視されれば、恥ずかしく感じるのも当然である。だが理事長にとって、そんな羞恥も快感となり、衣服が床に一枚一枚と落ちる毎に全身を火照らせていた。

「真っ赤だな。顔だけじゃなく耳や乳房も、脚まで……」

「脱ぐ所を視られるだけ幸せなのです。し、幸せ過ぎて泣きそうです」

「とんだ変態だよ。年増の癖にエロい下着も穿きやがって」

「勝負下着なんて二十年振りです。どうでしょうか？」

「まあ、やっぱり綺麗だな、理事長は」

生地が少ない、明らかに相手を惑わす下着である。祭祀も例外ではなく、四十代後半の完熟した魅惑に滾ってしまおう。理事長もまた、失われていた叙情の再訪に全身を燃やす。全裸まで待つことも叶わず、祭祀と理事長は同時に互いの身体を取り合った。

「エロい女だよ、本当に」

「ああ、光栄です。祭祀様っ!!」

「理事長っ」

「正美まさみと呼んで頂けないでしょうか……」

「分かったよ、正美」

「ああああっ、名前を呼ばれただけでっ!!」

「イッたのか？ 相変わらずの感度だな」

「キスして下さいっ!!」

「主人に命令するなっ!!」

「んっ、ちゅうっ、んっ、はあ、んっ、んんんっ!!」

「ちゅっ、んっ、いや、本当に五十歳とは思えない柔らかさだっ。それに、

正美の唾液も美味いっ。んくっ、俺の唾もくれてやる、全部飲むんだ!!」

「ま、まだ四十代ですっ……んっ、祭祀様の唾液っ、あああああっ!!」

そして、接吻に馳せる。若者の控え目なキスとは違い、正美の口付けは外国人のように激しい。情熱的な抱擁を交わしながら、露骨な音と唾液が辺りに飛散する。祭祀は、貪るという表しが適切な、このような口付けが嫌いではなかった。

「正美。そろそろ始めよう」

「かしこまりました。ああ、祭祀様の、私に下さいっ!!」

やがて祭祀が感極まり、隆々たる股間を突き出す。正美が受け、下着を脱いで赤裸々を披露する。正美は四児の母でもあり、相応の巨乳を誇っている。いまにも破裂しそうな実りに、祭祀の喉がゴクリと鳴った。

「なんつう爆乳だよ。Hカップくらいか？」

「Iカップです」

「堪らねえな。おい、俺の服も脱がしてくれ」

「はい。祭祀様のも、見せて下さいっ!!」

正美が不慣れながらに祭祀の衣服を脱がす。スーツを剥いで下着も取り、そうして現れたのは天井を仰向く男根である。さぞ立派に見えるのだろう、同じく正美の喉も鳴った。

血管の浮いたソレに、正美が腰を砕いて目を爛とする。

「あ、あああああつ、祭祀様のっ、あああつ、素晴らしいですわ♥」

「残念ながら、俺のは正美のように名器じゃないけどな」

「そんなことありません!! 祭祀様の逸物は、誰のよりも立派です!!」

「……まあ、そういうことにしておこう」

「私は、どうすれば良いでしょう？」

「とりあえず鎮めたい。机に手を付き、ケツを俺に向けるんだ」

「わ、分かりました。うう、は、恥ずかしいですけど……」

前戯は不要と言い、正美に立ち後背位を伝える。恥ずかしいと言いつつ、正美が嬉々として羞恥に甘んじる。締まりのない緩んだ面持ちは、とても代表理事の柄ではない。蕩けた秘境が床を濡らし、肉びらはペニスを誘うようにヒクヒクと舞っていた。

祭祀が真後ろに立ち、その大きな桃尻に何度と掌を打つ。

「胸だけじゃなく、ケツもデカイ女だな」

「やつ、あああつ、も、申し訳ありません……」

「正美は、男を悦ばせる逸材だ。これまで、かなりモテてきたんだろ？」

「あ、ありがとうございます。お尻も胸も大きい所為か、いままで多くの男性に言い寄られてきました。あまり思い出したくない過去です」

「そうなのか？」

「だって、いまは祭祀様だけのモノですから……」

「立場も歳も下な俺に、そこまで諂ってストレス溜まらないか？」

「寧ろ、とても心地良いです。こんな幸せは、いままでに有りません」

「年上の性奴隷が居るのも面白いな。そろそろ挿入れるぞ」

「お、お願い、します♥」

支配欲・服従感――

それぞれの味わいに、二人して酔い痴れる。祭祀が亀頭で秘境の入口をコツコツと叩いて肉ビラの具合を確かめる。正美の感度は既に最高潮へと達しており、亀頭の感触だけで艶やかな反応を見せていた。

「あっ、ああああ……し、幸せ……」

「まだ入ってないぞ」

「あ、足が地に付きません。天にも昇りそうな気持ちです」

「じゃあ、もつと幸せを味わわせてやるっ!!」

「あああああああああ……!!」

肉棒を呑み込もうとするように、肉ビラが「くばあ」と大きく開口する。カリが入り、そのままズルズルと奥底まで肉棒が沈んでいった。

「ぐう、なんて圧力っ!!」

「はあああんっ、ああああっ、ふあああああっ!!」

「ぐあっ、ヒダが絡み付いてくるっ、相変わらずの名器だっ!!」

「んんんっ、ま、待って。まだ動かないでっ、い、いま動かれたら……」

「どうなるんだ？」

「はわああああああああああっ!？」

根元まで埋まるや正美が硬直して微動だにしない。まるで筋肉が攣って身動きが取れなく見える。催眠の効果も相まり、実際には気の狂う快感に陥っているだけである。この状態から少しでも刺激が加重されれば、どうなることかと喜悦の恐怖に怯えていた。

これ以上の快感は危険だと正美が直感するも祭祀に慈悲は無い。下衆な表情を浮かべる祭祀は、ゆっくりとペニスを引き抜くと、今度は力任せに奥底へと突き上げてやった。

悲鳴のような絶叫で背を弓なりに、床には正美の潮が満ちる。

「ああああっ、ああああああああああああっ!!」

「初っ端から全開だな。もう少し軽めの刺激から始めれば良かったか？」

「あああ……い、いええええ、こ、これ、最高っ、ですっ……!!」

「まあ、本当に辛くなったら言うといい」

「わ、分かり、ましたっ、あああつ、はあああああつ!!」

バックの最中に、祭祀がスマホを取り出す。画面には催眠アプリが表示されている。正美を従順な雌に仕立てた道具であり、アプリでは対象者の感度までも調節が可能だった。

常態を一倍として、現在の正美は感度を五倍に設定されている。少しのスキンシップでもオーガズムに達するレベルだ。挿入だけで潮を噴き出し、一たび動けば失禁も避けられない。そんな状態の中にて正美を壊すが如く、祭祀は何度も手荒なピストンを繰り返していた。

「あがあああああつ、あああああああつ!!」

「おしっこ漏らしたな。臭うぞ?」

「いぎいいいいいっ、ひゃあああああつ、あああああつ!!」

「ダメだ……言葉も無い。快楽を貪るだけの獣になっちまった。いきなり五倍はやり過ぎたな。前は三倍でも気絶したんだもんなあ」

正美の瞳から光彩が抜け落ち、意識も既に蚊帳の外である。この快感の為なら人殺しだってするだろう。理性の禿げた正美は、学園の敷地内でもお構いなしに幸福を叫ぶばかりだ。

貫い快感か、相手の善がる姿に祭祀も情炎を燃やす。両手で尻を支えて、漠然と突くばかりな体勢から、徐々に密着を高めようと祭祀が前屈みへと移り行く。背中と腹部が重なり、祭祀の食指も正美の乳房へと這い始めた。汗ばむ乳輪をコリコリと啄み、時には強く抓り上げる。痛みすら悦楽に感じる正美は、なおも悲痛の幸せを謳う。幸福感は身体を通して祭祀にも伝わり、それがオーガズムという形を成して競り上がってきた。

肉の実を鷲掴み、腰で臀部を叩き付けて怒鳴る。

「くっ、イクぞっ……そろそろ、出すっ!!」

「ああああ、出してえっ、祭祀様の……精液っ、私にいいっ!!」

「中に出して良いんだよな?」

「ええ、勿論ですっ!! い、言うまでもありませんわっ!!」

「旦那が居るのに良いのか?」

「構いませんからあっ!! お願い、します……あああああああっ!!」

「正美は、やって後悔するタイプだな。まあ、この催眠アプリの快感には誰も逆らえないだろうけどな。じゃあ、イクぞっ、受け取れっ、全部!!」

「んんんんんっ、あああああああああああっ!!」

「くおっ、おおおおおおおおおっ!!」

その叫びにペニスが爆ぜた。

夫の居る身でありながら、一滴残らず中出しを受け入れる。トクトクと注がれる精液に悦び、祭祀と歩む未来を妄想する。心身で感じる最高潮のオーガズムにより、正美は再び潮噴き&失禁に堕ちるのだった。

「はあ、はあ、はあっ……」

「あ、も、もうダメツ、祭祀、様っ……」

「また気絶するののか？」

「も、申し訳っ……ありませんっ」

「言っとくけど、俺の一物は一度じゃ満足しないからな？　好きなようにして良いんだろ？　俺が満足するまで正美には叫んでもらうぞ」

「あ、あうう。わ、分かり、ました」

圧倒的な快感と疲労が正美を襲うも、祭祀がそれを許さない。スマホを取り出し、アプリで正美の操作を行う。まだまだ快樂責めは終わらないと言うと、正美は幸福の混じる苦笑いを浮かべるのだった。

「ん？　なんだこれ？」

「はあ、はあ、ど、どうかしましたか？」

「アプリが誰かを捉えたようだ。これって、さっきの二人だよな？」

「ん、そう、ですね……」

祭祀がアプリを操作していると、見覚えある二人組が画面に表示される。このアプリは、ブルートウースの電波を捉えるように、圏内の者が画面に浮かび上がる仕組みだ。現在は受信範囲を最小に設定しており、外に居る存在まではキャッチが出来ない状態である。にも拘らず、画面には先刻に無礼を働いた学園長、副長の二人が映し出されていた。

「なんでこの人達が表示されてるんだ？　この設定範囲では、部屋に居る正美しか情報が拾えない筈だが。んー、もしかして……」

「まさか？」

「学園長、副長。そこに居ますね？　盗み聞きとは趣味が悪いですよ」

その疑問と同時に、祭祀と正美が扉へと目をやった。

注視して、初めて扉向こうの気配を察知する。学園長と副長が廊下から祭祀と正美の様子を伺っていたのだ。聞き耳を立てていた存在に気付くと、学園長と副長は騒々しく理事室へと入ってきた。

「失礼します!!」

「り、理事長っ!?　なんて格好をしているのですかっ!？」

「裸で失礼します。けど、お二人は分かっていたのではありませんか？」

「盗み聞きについては申し訳ありません。しかし、いまはそれ処では無いでしょう。やはり二人は、そういう関係だったのですね？」

「やはりというと、前から疑っていたのですか？」

「以前の理事長は大の異性嫌いでした。なのに、唐突にこのような男性を雇用なさると言うのですから、なにかあると思うのは当然です」

「そうですね」

盗聴していた割には強気な学園長、副長がズカズカと祭祀達に詰め寄る。二人の全裸に戸惑うも一瞬だけであり、学園長が祭祀を睨むと、妖しげな笑みが浮かび始める。男を排する理由を見つけてホクホクなのは、明らかだった。

食って掛かる二人から祭祀を庇うように、正美が全裸の儘で前に出る。

「説明する時間を差し上げましょうか？　これは大問題ですよ!？」

「別に問題なんて無いでしょう。大人同士が二人で愛し合っていただけのことです。場所を弁えなかった点のみ、申し訳ないとは思いますが」

「まあ、なんと。本気で仰っているのですか？」

「良し悪しは委員会に決めてもらいましょう。とりあえず、この出来事は委員会に報告させて頂きます。宜しいですね？」

「学園長、委員会に報告するまでもありません。神聖な学び場で性交など言語道断でしょう。その男の解雇は当然として、理事長にも相応の責任を取って頂きます」

「取り付く島もないな」

「祭祀様。如何致しましょう？」

「お楽しみは明日にお預けだな」

どうしても厄介者を排したいらしい。正美と話しつつも、二人は祭祀を睨んで止まない。けんもほろろな二人の頑なに、祭祀が小さく溜息を吐く。一刻も早く若い女学生を味わいたい所に、また寄り道かよとウンザリした様子である。話し合いが通じぬのなら、取るべき行動は他にない。祭祀は、スマホに映る学園長・副長をタップすると、黙って「感度」の設定画面を開いた。

これで、いつでも二人を快樂の虜に導ける。次に反抗的な態度を取れば、すぐにでも二人の感度を五倍に肥大させて犯すつもりだった。

「こんな時に、なにをスマホを弄っているのですか!？」

「先生方は、どうしても男性を嫌っているようなので。一度、話し合いの場を設けるといえるのは如何でしょうか?」

「話す余地はありません。軽率な行動を悔いて辞表の提出を求めます!!」

「その前に、僕からも一つ良いでしょうか? 先生方が僕を糾弾するのは、この神聖なる学びの場で不適切な行動があったからですよね?」

「その通りです」

「なのに、随分と静観を決めていましたね?」

「えっ?」

「先生方は、最初から我々の様子を伺っていました。つまり、いつでも介入が出来た筈です。由緒正しい学園で不適切な振舞いが行われているのに、どうしても最後まで黙って行為を観ていたのでしょうか?」

「そ、それは、え、と……証拠を押さえる為に決まっていますでしょう!!」

「ええ!! あの愚劣な行為の終始をスマホで録音していたのです!!」

「現場を押さえた方が、より確実なのでは?」

「な、なにが言いたいのですか!？」

「もしかして二人は、我々の行為に心を奪われていたのでは?」

「なっ……!? ば、馬鹿らしいにも程があります!!」
「なにを言い出すかと思えば。私は、貴方のような男が大嫌いなんですよ。興奮どころか、吐き気を催します!! ええ、実に不快ですっ!!」

「そういう割には、なあ？」
祭祀の持つ催眠アプリは万能だ。文字通り、相手を好きなように操れる。二人の干渉が煩わしければ、行動を黙認させるように操作すれば良い話だ。しかし、祭祀はわざわざ「感度」の項目を選択する。学園長と副学長を快楽漬けで堕とす目論みだ。溜息を吐きながらも、祭祀には道草を愉しむ様子が窺えた。

それとは別に、学園長・副長の脳裏が気懸りだと祭祀は思う。ご丁寧に最後まで行為を覗き見していた理由は、不本意ながら自然と興奮していた故ではと予想する。当然の如く激昂する二人だが、祭祀の言葉を裏付けるように、アプリに表示された二人の情動は、結構な数値にまで伸びていた。アプリは、ただ精神操作するだけに非ず、相手の健康状態までも把握が可能である。正常の基準値を50として各々の数値が80を上回っているのだ。性的行為に嫌悪感を催しているなら、数値が0でも可笑しくない。数々の女性を籠絡した祭祀でも、思わずの結果に驚いていた。

「80超えって結構な数字だぞ？ 正美の時は、数値が10も無かったのに。これって催眠を使わなくても籠絡が可能なレベルじゃないか？ どうやら、二人は単なる男嫌いでは無さそうだな？」

「な、なにを言ってるの？」

「せっかくだから、先生方の『女』の部分を窺いたいと思ひまして」

「ええっ!? ち、近寄らないでっ!!」

「理事長が男嫌いだったのは数々のセクハラが原因でした。巨乳と巨尻に加えて四十代とは思えない美人だから、相当の苦勞をしてきたのでしよう。先生方の男嫌いも、同じ理由だと思つていたのですが……」

学園長も四十代であり、副長に至っては三十代と非常に若い。由緒ある女学園を任される身として女の美も欠かしておらず、二人とも年齢以上の豊麗を飾っている。顔立ちは整い、プロポーシオンも正美に負けず劣らずグラビアモデル並みだ。

だからこそ、男嫌いの理由が気になると言い、祭祀が二人へと詰め寄る。まだアプリの機能は使用していない。だが、祭祀の企みを察知するだけで、二人は顔を真っ赤に、更なる情欲を高めていた。

強気な口調は崩さぬも、全身を戦慄かせて、いまにも崩れそうである。

「なにを、そんなにビクビクしているんだ？　正美、この二人は一体？」

「わ、分かりません。このような二人は初めて見ました」

「とりあえず、このまま攻めてみるか」

「や、やめっ!!」

「あっ、ひゃんんっ!!」

二人が気になる祭祀は、一先ず接続だけ行ってスマホを仕舞った。

アプリの効果を使用せずに調教する試みだ。もし逃げ出されても端末に接続しているので問題はない。怯えきった二人へと、祭祀が両腕を絡める。祭祀の手が触れるや、学園長と副学長の二人が小さく悲鳴を上げた。

追い詰められた兎である。震えが止まらず、いまにも消えそうな音色だ。相手はかなりの難色だから、下手に手を出せば拳が飛んでくるものだと身構えていただけに、二人の反応には祭祀も呆気にとられる。だが、ここまで怖がられると、否応なしに嗜虐心を擦られた。

「やたら良い声を出しますね。でも、そんなに怖がるなんて……」

「もしかして、お二人は男性恐怖症なのでしょうか？」

「くっ……!!」

「う、ううっ!!」

祭祀と正美の言葉に、二人が紅潮した顔で俯く。それを肯定と受け取り、祭祀と正美は互いに目を合わせて笑う。二人の予想通り、学園長と副長は異性を得意としていなかった。

「なるほど。だから、いままで男を寄せ付けなかったんですね」

「……………」

「私も初めて知りました。お二人が、内心で男性に怖気ていたとは」

「でも、おかしいな。それにしても、やたら感度が良いような？ 正美を相手にした時は、拒絶感が本当に酷くて中々濡れてくれませんでしたよ？ でも、お二人は感じてくれてますね。数値にすると……………おいおい、欲情が90ポイントを超えてるぞ!」

「つまり、男性恐怖症だけど男に興味津々……………ということでしょうか？」

「ははっ、面白いな。初めてのタイプだ」

「あっ、んんんっ!」

「ふああああっ!!」

先程までの強気は何処へやら、スキンシップが始まってから、優位性が一気に逆転してしまう。祭祀が両腕に二人を抱え、間に反り立つペニスを臀部に挟み込むと、もはや二人は言葉すら発せられなくなっていた。

「ふああっ、いつの間にか祭祀様のおちん○んが逞しくなってますっ♥」
「無性に興奮してなあ。先生方も、そうなんでしょう？」

「そ、そんなことっ……!!」

「は、離して下さい。こ、これは明らかなセクハラですよっ!!」

「ハラスメントは嫌がらせという意味ではありませんでしたか？ 本当にお二人が嫌がっているのなら問題ですけど、この身体の反応を見る限りは、そう思えませんか？」

「あっ、ふううんんっ!!」

「い、嫌に決まっ……あっ、ダメッ!! あっ、やああっ!!」

まるで乙女のような反応を見せる学園長・副学長だった。

二人を抱えてスーツ越しに豊かな乳房を撫でると、それだけで艶やかな音色を部屋に響かせてしまう。実際に乙女なのだろう、幼少から女学園で育った二人は、これまで異性との関りが皆無に等しかったのだ。

いい歳にもなっって異性に不慣れな自分を恥じり、それを押し隠すように男を避けてきた二人である。真面に異性と触れ合ったのは、これが事実上初めてだと言っって良い。それでいて性欲は旺盛なのだから、初めて味わう男の感触や一物、匂いに魅入られるのも仕方なかった。

「まさか処女の筈は無いですよ。此処まで善がるんですから」

「う、ううっ……」

「くうっ……」

「マジで処女なの？」

「……」

「ヤバいな。これはマジで興奮するぞ」

「ああ、祭祀様っ、私も興奮して仕方ありませんわっ!!」

「おお、濡れ濡れじゃないか、正美」

「常に厳格な二人の、こんな惨めな姿を観たら、萌えるのも当然ですっ」

「ああ、俺もビックリだよ。それじゃあ、そろそろ洒落込みますかっ」

「はいっ!!」

祭祀の道草は4Pへと発展する。正美の気力も十分であり、自らの指で局部を掻き入れると、ドバツと液音を立てて汗が漏れる。正美への催眠はそのままであり、いまも感度は人間のそれを遥かに超えていた。

印象と遥かに異なる代表理事の異様な興奮に、学園長と副学長が身震いする。逃げ出したくても、身体が竦んで一切の身動きも取れない。祭祀は、そんな二人を強く抱えてワイシャツのボタンを外し始めるのだった。

四

「学園長。副長も、凄く良い匂いしますね」

「あああつ、お、お願い、今宵さんつ、も、もう止めてっ……か、解雇の話は、な、無かったことに、し、します、からっ、んっ、ふあっ!!」

「あああ、どうなってるの。今宵君につ、髪の毛の匂いを嗅がれてっ、何故っ、こんなに身体が熱くなるのっ、はあ、はあ、はあっ!!」

「祭祀様あ、私の匂いも嗅いで下さいませっ!!」

「正美のは嗅ぎ飽きてるんだよ。まあ、良い匂いだけだな」

「飽きてるなんて酷いです。けれど、ありがとうございますっ ♡」

「こ、今宵君っ、アナタいつから理事長と、そんな関係にっ……」

「僕のこととは祭祀と呼んでくださいよ。身体を重ねる仲なんですから」

「ううっ、勝手に重ねておいてっ……」

「僕も名前呼びますから。学長が英子で、副長は千恵美ですよね？」

「ヒ、ヒトの名前を気安くっ……」

「名前くらいでなんですか。だから未だに男慣れしないんですよ」

「うっ……」

「美女を抱き寄せながら、匂いを堪能してチンコを擦る……なんて甘美な快感なんだ。こうして皆さんのお尻に扱かれてるだけでもイキそうですよ。ほら、皆さんも僕のチ○コの悦びを感じるでしょう？」

「げ、下品なっ……!!」

「と言いなながら、千恵美先生も感じてるじゃないですか」

「あ、あああっ……そ、そんなこと……」

「英子先生も、気持ち良かったら声を出して良いんですよ」

「んんんっ、や、やめっ、胸っ、揉まないでっ……」

「信じられない。正美に次ぐ爆乳を持ちながら、男を知らないなんてっ」

理事室で勃発したハーレムに、祭祀が陶酔の音頭を取る。英子と千恵美、正美という学園のスリートップを胸に抱え、反り立つ陰茎を三人の臀部に突き上げる。タイトスカートの英子・千恵美に全裸の正美と、それぞれの異なる感触が祭祀を極楽の都へと誘った。

臀部で感じる漢らしい一物には、祭祀へと心酔する正美だけに留まらず、男の味を知らぬ英子と千恵美さえも夢中にさせる。言葉では反抗しつつも、身体はしつかりと感じており、既に全身は情炎に灯っていた。

「ひやああああっ!? な、なにをつ!?」

「なにつて、ただおっぱいを観たいなあと」

「や、止めて下さいっ!!」

「もう止まりませんよ。お二人がエロい所為で」

「あっ、ううううっ!!」

「ひいつ、んっ、ううっ!!」

「二人とも恥ずかしがり屋ですね。倍近い歳の先生方を相手にしてるのに、何故か学生時代を思い出しました。ただのブラジャーじゃないですか。観られて減る訳でも無いのに。もうブラジャーも外しちゃいますね」

「きやあああああっ!!」

第四ボタンまで外して現れたのは、英子と千恵美の乳房である。正美に及ばないものの、大きさは一流雑誌の表紙を飾れる程に見事だった。

下着からの責め苦を好む祭祀だが、情欲が極まり過ぎて其れ処ではない。あっさりと下着も剥ぎ取り、待望の乳房を解放させる。年増で張りが無く、だらんと下りた乳房に、二人の恥辱な悲鳴が部屋で轟いた。

「乳首……痙攣してますね。祭祀様、絶景ですよ」

「おお、見たいぞ!! ほら二人とも、コッチを向いて下さい」

「ひいいいっ!?」

「ううううううっ!!」

「おおおおおっ、スゲエっ!!」

背後から抱えていた二人を振り向かせる。正美のも併せて六つの巨大な乳房が眼前に広がると、祭祀は感動の声を上げた。

異性にトツプレスを晒す羞恥から、英子と千恵美が涙を零している姿も祭祀の情欲を攪る。いつの間にか口内が唾液で一杯となり、堪らず祭祀は突起した乳首へと塗りたくるのだった。

「ぶちゅっ、じゅるっ、ぐちゅっ、んちゅっ……」

「ひやあああっ、な、なに、をっ……」

「そんな、男性に乳首をっ、あああっ、こ、こんなことっ……」

「祭祀様はおっぱいが大好きですからね。それに、とてもお上手なのです。乳房を揉まれて乳首を舐められ……たまに甘噛みして下さるのも最高です。ああああ、想像するだけで蕩けてしまいそうです。祭祀様、私のは舐めて頂けないのでしょうか？」

「三人は無理だろ。正美はフェラしてくれ。イキたくて仕方ないんだ」

「フェラも大好きですっ!! かしこまりましたっ♥」

英子の右の乳房と、千恵美の左側を寄せて二つ同時に味わいを確かめる。これまで異性に裸を晒したことの無い二人は、当然ながら此れが初めての愛撫となる。初めは戸惑うばかりだった英子・千恵美だが、感度が限界に達していたことから、すぐさま性的快感を理解するようになる。夢にまで見た異性との交わりである。男を遠ざけながらも、内心では異性との触れ合いに憧れていたのだ。押し寄せる快樂の波に攫われてしまい、英子達は全身をピクピクと何度も跳ねらせた。

それが恥ずかしいのだろう。歪んだ表情も見られたくないようで、共に両手で顔を覆い、必死に喘ぎ声を押して身を固くする。アラフォーの女性達の、まるで乙女のような反応だった。

「おっぱいばかりじゃ、つまらないでしょう。こっちも行きますか？」

「あああああつ、そ、そこはっ、そこだけはダメですっ!!」

「ううううっ、わ、私は……や、やって欲しいかも……」

「千恵美先生っ!? なにを言ってるの!？」

「はあ、はあ、はあ……理事長や今宵先生の言う通り、私は淫乱なんです。でも、こんな歳で男性経験が無いのが恥ずかしくて……それを隠すように振舞ってきました。なんとも愚かしい話です」

乳首を愛でる祭祀は、続いて英子・千恵美のタイトスカートに両の手を忍ばせようとす。このまま一気に二人を墮とそうと、今度は局部責めに入っただのだ。当然の如く英子が反発して身を振り出す。しかし、意外にも千恵美は祭祀の触手を受け入れていた。

「こんな形なのは不本意ですが、それでも今宵先生のような若くて格好も良い男性に触れて頂けるのは嬉しく思っています。いま私は、異様なくらいに興奮しています。このような肉欲に塗れた処女な私でも、先生は受け入れてくれるのでしょうか？」

「千恵美先生の本音が聞けて嬉しいですよ。ええ、勿論です。素直な女性は大好きです。いまの千恵美先生の告白を聞いて、思わずイキそうになってしまいましたよ。僕で良ければ、全力で千恵美先生を幸せにしたいと思えます」

「ああっ、今宵先生っ!!」

「祭祀と呼んでと言ったじゃないですか、千恵美先生？」

「は、はい。さ、祭祀、先生っ♥」

「では、千恵美先生を思いつきり悦ばせたいと思います。さて、学園長は如何致しますか。ここまでやっというてなんだけど、強制はしませんよ」

「ううううっ、そ、そう言われても……」

千恵美は屈した。

祭祀を受け入れて、そのまま処女まで捧げようとする勢いだ。

一方で、学園長こと英子は戸惑った儘である。両手を開いて久しぶりに祭祀に顔を見せる。顔面は真っ赤に染まり、涙や汗で化粧ごとドロドロに崩れていた。

だが、目を逸らすことはせず。潤んだ瞳で祭祀を見上げると、最後には消えそうな声で小さく「私もお願いします」と呟くのだった。

「ふあ、流石は祭祀様。催眠を使わずに二人を取り込んでしまうなんて」

「しーっ、その単語を出すなっ!!」

「すみません。でも、二人を知ってるだけに、この結末は驚きですわ」

「だな。アプリを使わず二人の処女を相手に……俺の腕が試されるなっ」

「あっ、んんっ、さ、祭祀先生っ……」

「ううう、や、やっぱり、恥ずかしい、です……」

英子と千恵美を抱き、ゆっくりとショーツを脱がしていく。愛液の染み込む下着を黙ってポケットに仕舞い、漸くと二人の局部がお目見えとなる。処女とは思えぬ洪水量に、祭祀の股間もピクリと唸りを上げるのだった。

「じゃあ、三人ともお尻を僕に突き出すようにして下さい」

「うううっ、恥ずかしいっ!! で、でも、なんででしょうか……」

「男性にアソコを凝視されていると考えるだけで身体が燃えるようです」
「祭祀様。これから、どうするのですか？」

「決まってるでしょ。一人はセックスの相手に、後の二人を両腕で……」
「だ、誰を最初にするのでしょうか？ その、セックスのお相手は……」

「当然、私ですよね？」

「正美の訳が無いだろう。千恵美先生かな。先生の告白には、本当に痺れました。僕のこと若くて格好良いと。嬉しかったです。宜しければ、意の一番に抱いてみたいです」

「こ、光栄です。よ、よろしく願いしますっ!!」

「うう、私は二番目ですか。もっと早く素直になれば良かった……」

「大丈夫ですよ、学園長。祭祀様は指のテクニクも最高ですから♪」

「セックスしながら二人に指マンは経験無いけど。まあ、やってみよう」

理事室の巨大な机に三人が並んで手を付き、大きな尻を突き出ししている。桃尻がフリフリと左右に揺れる絶景には、祭祀の興奮も収まらない。なお、祭祀の趣味で英子と千恵美はタイトスカートを穿いた儘である。一番手は中央で臀部を晒す千恵美だった。

ピタリとくっ付き、優しく尻を撫でると、それだけで千恵美が歓喜する。肉ビラが露わとなっており、亀頭が宛がわれるだけで反応して見せたりと、処女とは思えぬ感受性だ。最後に是非を問い、千恵美がハッキリと頷くと、祭祀はゆっくり肉棒の挿入に掛かった。

「ふっ、あああああっ!! こ、こんな格好良い男性に、私がっ……」

「なんて吸い付きだ。本当に処女なんですか、千恵美先生っ?」

「は、はい。いままで男性とは、手を繋いだこともありませんっ!!」

「四十歳近い女性の初物……こんなに良いとはなっ!!」

「ああああああああああああああああっ!!」

末に、破瓜を得る。処女喪失に伴い、千恵美が絶叫を木霊させた。

しかし、大した痛みでは無かったのか、その悲鳴の中にも悦楽の音色が混じっているのは明らかである。異性との触れ合いや処女喪失の達成感は、千恵美を弛まぬオーガズムへと導いていた。

「千恵美先生、動いて平気ですか？」

「も、問題ありませんっ、祭祀先生のお好きに動いて下さいっ」

「千恵美先生、良い人だったんですね。分かりました。優しくします」

「あ、ありがとう、ござ、いつ、んんっ、ふあああっ!!」

「祭祀様。私達もお相手して下さいませ♥」

「う、うう……」

「そうだな。正美、英子先生、行きますよ」

「ああああああっ!!」

処女の割に善がる千恵美に、祭祀も気負いなく腰部を動かす。千恵美の感触は、まるで淫乱なヤリマンの其れである。侵入した肉棒へと満遍なくヒダを絡め、動きに合わせてキュツと窄めてくる。愛液も止め処なく溢れ、祭祀のアクメを助長した。

千恵美の心地に理性が剥げる中、微かに残った気力で正美、英子に手を伸ばす。未だに催眠アプリの効力が持続する正美は言うに及ばず、英子も肉壺が熟し切っていた。

少し指を入れると、反発するように肉窟が蠢動する。それらを振り切り、まず祭祀は、内部に氾濫する愛液を掻き出していった。

「ひやあああああああつ」

「あああああああああつ」

「凄い。愛液の量だけなら、英子先生の方が多いくらいだ」

「あああああつ、祭祀先生つ、こ、腰の動きが止まって、ますつ……」

「あ、すいません。セックスしながら手マンの経験が無くて」

「あああつ、んんんつ、動いてるつ、あああ、出ちやいますつ!!」

「千恵美先生も愛液が半端ないですね。どんどん外に溢れちまうつ!!」

「あああああああああああああつ!!」

「出ちやう、出ちやう、出ちやうううつ!!」

「この部屋つ、めっちゃ女臭いなつ!! くうう、興奮が収まらないつ!!」

ボタボタと三人の肉壺から女汁が漏れていく。床下は大きな水溜まりが作られており、とにかく臭いが凄まじい。それもその筈である。千恵美と英子の二人は、此れまでの何十年という人生で未だ一度も陰唇から愛液を掻き出したことが無かった。

全ての自慰はクリトリスに任せて膣を使用したことが無い。その所為で、愛液の濃度が桁違いなのである。鼻部を曲げるような雌の臭いに、流石の祭祀も顔を顰めていた。

だが、そんな淫猥な雌の臭いも次第に癖となり、どんどん祭祀の動きが加速していく。まるで千恵美の子宮を叩き潰さんとする勢いで腰部を叩き付ける。凄まじい猛攻に、千恵美の意識が刈り取られる。意識を落とした一瞬に失禁するも、誰も反応を見せない。全員がもう一度オーガズムへと陥るまで、誰一人として無駄口を挟めない佳境だった。

「あああん、千恵美先生ってば、顔が真っ赤っ♥」

「はあっ、はあっ、はあっ、り、理事長もっ、人のこと言えませんよっ」

「祭祀様の指テクが素晴らしいものでっ!! 学園長は、どうですか?」

「ああああっ、ああああっ、ダ、ダメッ、な、なにも考えられませんっ!!

祭祀先生にお尻を突き出すだけでも気持ち良いのに、そ、その上っ、指を入れられて、中の、お汁を……それに、変な所を引っ搔かれてっ、それが気持ち良すぎてっ、なにも考えられませんんっ♥」

「そこがGスポットですよ。祭祀様は弱点を捉えるのが上手なのです♥」

「殆ど勘ですけどね。千恵美先生は、どうですか?」

「き、気持ち、良いですっ、こ、こんな快楽があつたなんて……なのにつ、私ってば男性を毛嫌いして、祭祀先生にまで悪態を吐いて……もう自分が恥ずかしくて仕方ありませんっ!!」

「まあ、良いってことです。こうして仲良くなれたのですから」

「さ、祭祀、先生っ!!」

「なんです？ 千恵美先生」

「私、初めてのエッチは、好きな人と……って決めていました」

「乙女チックですね。僕が奪ってすいません」

「い、いえ。願いが叶って、幸せ、です……あああつ、んんんっ!!」

「えっ!？」

「す、好きです。祭祀先生のこと、好きになってしまいましたっ!!」

「千恵美先生っ……」

「んっ、ふうっ、んっ、副学長……」

「あああん、千恵美先生。祭祀様は私のですからね？」

「私の初恋です。四十歳を迎える歳なつて今更です。でも、この気持ちを大切にしたいんです。なので、今日からライバルです、理事長っ!!」

「ふあああん、望む所ですわ♥」

「……」

「そろそろイキますよ。千恵美先生、良いですかっ？」

「は、はいっ、祭祀先生……祭祀、さんっ!!」

「私もイキますっ、あああ、祭祀様ああっ!!」

「くっ、じゃあ全員同時にイクぞっ、おおおおおっ!!」

告白・宣誓をする千恵美に、余裕の表情を浮かべる正美である。加えて、なにか言いたげな英子もおり、祭祀も満足げな様子だった。

祭祀の雄叫びに呼応して、正美、千恵美、英子の三人も雌の泣きを解き放つ。一同に尻を持ち上げ、背筋をグツと弓なりに、最後は顔を天井へと見上げて果てるのだった。

ドクツ、ドクツ、ドクツ、ヌプウ……

「ひあっ、あああっ、あっ、あああっ……祭祀さんっ、ふああっ……」

「ひえええ、さ、祭祀、様あ……」

「はあ、はあ、はあ、さ、祭祀、先生っ……」

「出し切ったっ、千恵美先生の中につ……!! こんな暴発するとはっ!!」

「祭祀さんの、中で感じます。幸せ過ぎて、夢心地が止まりませんっ!!」

「つい勢いで中に出しちゃったんですが、良かったんでしょうか?」

「遅すぎたくらいです。妊娠していたら、責任を取ってくれますか?」

「うっ……」

「ふふ、その時になったら考えることにしましょう」

オーガズムの感謝祭に、女性組は疲弊したようにぐったりだ。

祭祀も、ありつたけの精液を放ってペニスを萎えさせる。もう千恵美は祭祀にゾッコンであり、中出しをされても、うっとりした様子だ。祭祀に
しな垂れ掛かり、妊娠した際は産む気が満々のようだった。

それに嫉妬した正美が続いての相手にと祭祀に寄り掛かる。無理にでも勃たせようと、祭祀に口付け&手淫を執る。だが祭祀は次の相手を英子に決めており、引っ付く正美を跳ね除けた。

「あん、祭祀様あ……私の番はいつですか？」

「お前とは散々ヤツただろうに。俺は、英子先生とエッチがしたいの」

「……………ツ!？」

「英子先生、良いですか？」

「う、うう……………」

「どうやら学園長は、副長ほど素直じゃないみたいです」

「そうなのか？ 二発も出したし、無理に今日しなくても良いけど……………」

「あ、お、あ、ダ、ダメですツ!!」

「ん？」

「わ、私も…………私の処女も奪って下さいっ!!」

連続で射精して疲弊したペニスだが、求められれば奮起する。英子から躊躇いがちの返事が零れる。千恵美のように素直になれない英子であるも、気持ちちは一緒のようだ。アプリに表示された情欲の値は最大に達している。アプリを確認するまでもなく、英子の全身の火照りや、肉壺から漏れ出る愛液を観れば興奮など一目瞭然であり、初めての性体験にて英子の情動は燃えつつ放しのようだった。

念願の処女喪失を目の当たりに、堪らず英子が祭祀に懇願する。

「ああ、あの学園長が僕に縋ってくれるなんて……」

「祭祀先生……私の相手もして下さいますか？」

「ええ、勿論です。英子先生の相手が出来て光栄です」

「あああ、う、嬉しいです……祭祀先生♥」

「祭祀様、モテモテですねえ。見ていてイラついてしまいます♥」

「学園長とも竿姉妹に。これから、どうなってしまうのでしょうか……」

「深いことは後で考えましょう。では英子先生、行きますよ？」

「は、はいっ!!」

「学園長が自ら……祭祀さんには、本当に凄い魅力があるようですね」

「ええ。私も、学園長も、副長も。みんな最後には惚れちゃうのです」

「ひゃああくん、祭祀先生のっ、入ってくるううっ!!」

「うおお、英子先生のも、こりや凄いな器みたいだっ!!」

「祭祀さん。お手伝いします。キ、キスを宜しいでしょうか？」

「千恵美先生っ、勿論ですっ!!」

「ああ、キスに憧れていました。こんなにも気持ち良いのですね」

「あくん、私にもキスして下さいっ」

「正美っ!! ああ、三人でキスしよう」

「はあ、はあ、はあ、いい、良いなあ。私もキスに憧れてるのにつ!!」

「英子先生とは、セックスが終わったら、ねっ!!」

「はいっ!!」

交わる英子、絡む千恵美と正美。爛れた4Pハーレムに満悦の祭祀だが、これは、まだ始まりに過ぎない。始まってもいない。教師として就任する明日が漸くのスタートであり……その女学園まるごと催眠計画に比べれば、今日の祭事は、取るに足らない一ページに過ぎなかった。